

「手話」で会話すること

熊本聾学校 主任事務職員 井 由紀子

熊本聾学校に赴任して14日目に起こった「平成28年熊本地震」。私自身3度目の異動で、やっと年度初めの繁忙期も落ち着いてきて、そろそろ学校の事を知りたいな。と思っていた矢先の出来事だった。

最初の地震が起こった夜（4月14日21時26分）、熊本聾学校の寄宿舎には生徒がいた。私は、耳が聞こえない生徒たちが先生方と一緒に避難しているだろうと不安になり、避難所となっていた第二高校へ駆けつけた。そこでは、先生方が必死で生徒たちと手話でコミュニケーションをとり、安全を確保するために動かされていた。避難所となっていた第二高校の体育館も危険であったため、夜半に隣の小学校のグラウンドへ移動し、その後、翌朝まで校長公舎で過ごした。私は小学校のグラウンドへ避難し、少し落ち着いたところで帰宅した。

避難所から避難所へ移動する際には、寄宿舎で日ごろから訓練されている成果もあり、先生方が落ち着いて生徒の誘導をされている姿が、とても印象的であった。幸いにして、翌日（4月15日）の午後には寄宿舎生全員が家族の元へ帰ることが出来た。

この経験は、「耳が聞こえない」彼らの命を守るためには何が必要なのか、改めて考える機会を与えてくれた。

熊本聾学校では赴任すると、新任式で生徒職員の前で挨拶をするために、まず「手話で自己紹介」することを学ぶ。手話で会話をするに対して、初めはプレッシャーを感じていたが、挨拶を身につけることで、手話に対する戸惑いが薄くなり、その後には生徒たちと関わる時にも、自然と会話することができるようになっていた。

本校の職員の中には、長年勤務している方も多く「聾学校」の専門性を強く感じている。そこには、手話を母語として生活している児童、生徒と手話との関わりが大変重要であることが考えられる。また、私を含め日常で手話と関わらない人々が、「手話」を特別な言語と誤解し、敬遠しがちであることも、改めて認識できた。

「手話」は決して特別な言語ではなく、それぞれの国の人々が、その母国語を話す事と同様に、手話を話す人たちの当たり前の言語として、社会に受け入れられるように、理解を深めていくことが大切であると感じた。ろう者の方とも恐れず、とりあえず“やってみよう精神“で、手話又は筆談で会話することから始めてみようと思う。

～日本財団のホームページから抜粋～

ろう者の母語、手話について知ろう

「聞こえる人は、ろう者に対して『障害者だから支援しなければ』と考えがちですが、ろう者の側では、手話について理解してくれるだけでいいと考えています。それだけで多くのことが解決するはずです。最終的には、聞こえない人も聞こえる人も、対等な人間同士としてコミュニケーションが図れるようになることを目標としています。

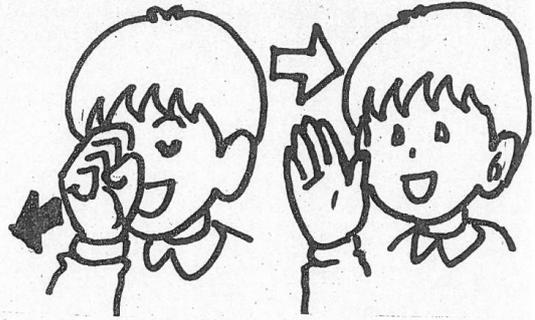
→→→ 手話での挨拶を掲載します♪皆さんも始めてみませんか？ →→→

初めまして

(初めて+会う)



よろしく (お願いします)



おはようございます



こんにちは



ごくろうさま



さようなら



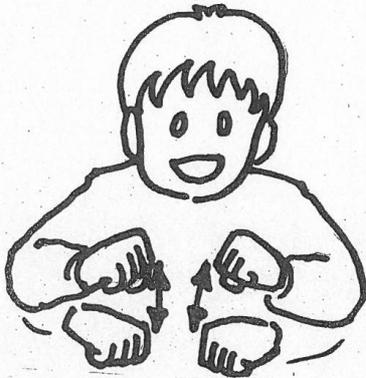
うれしい (楽しい)



ありがとう



がんばって (がんばる)



ごめんなさい

